

# お お ぞ ら

No.172

聖隷福祉事業団への法人移管後は55号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功  
編集者 横地健治

2016年2月1日

## 最近のショートステイ状況

横地 健治

聖隷おおぞら療育センター(以下、おおぞらと略す)は2011年末に増床工事を終え、2012年1月から4月の間に、対象地域のすべての入所待機者の入所を終えました。在宅だけでなく、新生児病棟(NICU)と小児病棟でも、この時点で、入所を希望して入所できない人はゼロになりました。これ以後、おおぞらでは、大きな在宅支援機能を持ち、入所では常に空床を持つことよって、できるだけ長く在宅生活を送ることができる仕組みを作っています。この仕組みのもと、在宅生活が破綻しそうなようになると、いつでも入所できるようになっていきます。よって、これ以後のおおぞら入所者数は、対象地域の重症心身障害入所ニーズの新規発生数を示しているになります。なお、おおぞらの担当地域は、静岡県西部地区(浜松市とその周辺)と愛知県東三河地区(豊橋市とその周辺)です。両者の総人口はおおむね200万です。

こうした状況で、2012年4月から2015年12月ま

での入所者数を、年平均にしてみると約6名でした。その内訳を年平均で見ると、小児45人に対し、成人は1.5人でした。さらに、小児の3/4は人工呼吸器使用者でした。昨今の入所者の大半は、高度医療的ケアを要する小児ということになります(この件は前々回の本通信で述べました)。

これに対し、新たに在宅支援を受ける地域の重症心身障害児(者)はどのくらいの数になるのかが問題です。しかし、この数を知ることは容易ではありません。入所に至る重症心身障害の多数は、高度医療的ケアを要する人たちです。この人たちの多くは、ショートステイを利用してはるはずです。そうした前提に立ち、地域の医療的ケアを要する重症心身障害の発生数を推測するため、ショートステイ利用者数の推移を調べてみました。

2007年から2011年の5年間は、ショートステイ利用開始した人の総数は、年間4~11名(平均7.6名)でした。ショートステイ枠が

20名となった2012年には、31名と急増しました。翌年(2013年)もこの傾向は続き、28名と多数でした。この2年をまとめて、ショートステイ利用開始者の年齢の内訳をみると以下のようです。乳幼児(6歳未満)が34%(20/59)、小児(6-17歳)が44%(26/59)、成人(18歳以上)が22%(13/59)でした。全年齢に渡っていました。2014年になると、ショートステイ利用者数は10名と激減しました。この傾向は翌年(2015年)も続き、17名でした。この2年をまとめて、その年齢の内訳をみると、乳幼児が67%(18/27)、小児が7%(2/27)、成人が26%(7/27)でした。前2年と比べると小児の年齢層の利用開始者が激減してしまいました。なお、この2年の乳幼児の67%(12/18)は人工呼吸器使用者でした。

こうしてみると、2012~2013年では、今まで家庭だけでみていた学齢小児が初めてショートステイを使うことが多かったということになります。ショートステイ枠が増え、ショートステイを使いながら在宅生活を送ることが、この頃に定着してきたのではないかと思えます。そう

なら、それ以後の利用開始者は、新たに在宅生活を始めた医療的ケアを要する重症心身障害児(者)を表していることとなります。重症心身障害の大半は、出生前か周生期、または乳幼児期に発症します。そうすると、乳幼児期にショートステイを開始した数が問題となります。この数を2012~2015年の4年で見ると、7名・13名・5名・13名(年平均9.5名)でした。医療的ケアを要する重症心身障害を発症したすべての人が、すぐにおおぞらのショートステイを利用したとすれば、おおぞら対象地域(人口約200万)での医療的ケアを要する重症心身障害の発生数は年間9.5名を少し超えた数ということとなります。少し超えた数になるのは、乳幼児期を過ぎて、医療的ケアを要する重症心身障害を発症する人が少数いるからです。

なお、2012年4月から2015年12月までの間に、8名がショートステイを経ず、病院からおおぞらに入所していました。年平均にすれば約2名です。これを加えると、年間12名程度の数になります。おおぞらを利用していない人の数はわからないので、これを本当の全体数とす